

## 14. フィールドワークをやってみよう

### 1 他者を知る方法「フィールドワーク」

#### 〔1〕フィールドワークとはなにか

フィールドワークとは「現地調査」「野外調査」を意味し、研究者が研究対象となる地域や社会に赴き、その土地に暮らす人々と生活を共にしながら対話し、生活や社会の仕組み、その土地ならではの考え方の枠組みを理解しようとする社会調査の手法です。フィールドワークという調査方法は 20 世紀初頭に文化人類学の方法として誕生し、その後社会学、民俗学、地理学など幅広い分野で用いられるようになったとも言われています。

人類学者は1年から2年、あるいはそれ以上の期間、見知らぬ土地へ出かけその土地の言語を習得し暮らしに溶け込みながら、民族誌を執筆します。フィールドワーカーは、現地の人々の行動を観察し、そこに暮らす人々から詳細な話を聞き（インタビュー調査）、自分自身も同じ経験をすること（参与観察）を通じて他者を理解し、異文化を理解しようと努めます。

社会調査の手法には、フィールドワーク以外にもアンケート調査、面接調査など多様な手法が存在します。もちろんアンケート調査も、多くのサンプルを一度に効率的に得られる点などで有効な側面を持っています。その一方、人類学のフィールドワークでは効率的にデータを集めることを重視するのではなく、長期に渡ってその土地に身を置き、現地の人との間に信頼関係（ラポール）を築いた上で、データを集めることが重要であると考えられています。なぜなら、人は信頼できると感じた人にこそ心を開き、本音を語る人が多いと考えられているためです。

また、人類学者は自分が知りたい質問を一方向的に投げかけ、効率的にデータを収集するのではなく、フィールドの人が自ら語ろうとする言葉に耳を傾けます。フィールドで得られるデータには無駄なものはなく、その土地で出会う様々な文化を総体的に捉えようとするのがフィールドワークという社会調査活動です。

## 【2】 他者を知ることで、自己を知る

ここで大切なのは、地元の方から直接話を聞かせていただくこと、共に体験させていただくということです。出来ることなら地元の人と同じものを食べる、同じものを着る、同じことを体験させてもらう。そうすることで地元の方との一体感が増し、社会や文化を多様な角度から立体的に観察することが可能になります。

また、皆さんが自分の眺めたいようにその社会を見つめるのではなく、調査対象となる社会の論理に寄り添って、その土地の暮らし方、考え方、モノの眺め方を理解するよう努力することも必要です。

私たちは普段の生活の中で、自分自身が所属する社会で身につけてきた習慣や、規範、考え方の枠組みが他の社会から見れば特殊であることに気づくことができません。しかし、フィールドワークを通じて、見知らぬ世界にたった一人で出かけ、その社会に暮らす人々の生活の仕方、考え方に寄り添いながら、他者を理解しようと努力するうちに、当たり前すぎて見えにくかった、自分自身が身につけたモノの見方、眺め方が実は普遍的なものではなかったことに気づくことができます。

## 【3】 さあ、フィールドへ出かけましょう

日常生活の中で小さな疑問を抱えたとき、皆さんはどのように解決のための手掛かりを集め、分析し、解決していますか？例えばインターネットで情報を収集する、図書館で本を手にとってみる、新聞を読み込む、こうした方法も皆さんの疑問を解決するための重要なヒントを与えてくれることでしょう。しかし、インターネットや本、新聞に書かれていることは全て正解ではなく、あくまで1つの考え方に過ぎません。情報化社会の中で、皆さんの目の前に一方的に提示される情報を鵜呑みにするのではなく、皆さん自身が実際に「現場へ」「フィールドへ」出かけ、自分自身で経験し、そこで息をしている生身の人と関わってみてください。自分の目で見ること、自分の肌で感じること、人から話を聞くことを通じて他者と関わり、今を生きる自分や、日常の生活場面を見つめ直してみてください。

皆さんに新たな視点を提供してくれる異文化は、遥か遠くへ出かけなければ会うことができないわけではありません。身の回りで起きている出来事も、自分がこれまで身につけてきた価値観を相対化し得るフィ

ールドワークの手法を用いて眺めてみる事ができれば、皆さんの日常生活を新たな視点で捉え直すことができるはずです。

つまりフィールドワークは、皆さんがこれまで出かけたことのない世界に飛び込み、日常を新たに捉え直すための方法でもあるのです。

## 2 フィールドワークで身につく力

フィールドワークは、学問的な調査手法であるだけでなく、それを通じて身につく力が、実社会で役立つという点でも今大きな注目を集めています。

### 〔1〕コミュニケーション能力の向上

皆さんがフィールドで出会うのは、生身の人間です。皆さんはフィールドワーク中に、土地の人と同じ経験をするので、またそこに暮らす人々と対話することで他者と関わり、他者を知ることになります。フィールドでは、自分とは異なる世代、性別、異なる習慣や考え方の枠組みを身に付けた様々な背景の人たちとコミュニケーションを図る能力が必要とされます。

例えば、人から話を伺う際、自分が聞きたいことを一方的に聞くのではなく、相手に気持ち良く話してもらうことが大切です。現場で人と関わることを通じて、相手を理解するために話を聞き、相手の立場でモノを考えるための訓練ができるのがフィールドワークでもあります。

どのように質問すれば答えやすいのか、この人になら話してもよいと信頼してもらえる接し方を考えてみましょう。教室内でインタビューをする側／される側にわかれて、調査をシュミレーションしてみるのも有効でしょう。



## 〔2〕 他者への想像力を膨らませる

皆さんはフィールドワークを通じて、これまで出かけたことのない場所へ足を運び、様々な価値観に出会うことで、自分の価値観が必ずしも普遍的ではないことに気がつくことができるでしょう。

大学生活では、大学やアルバイト先、サークルと自宅の往復ばかりで、皆さんと似た環境に暮らす仲間と接する機会が多いのではないのでしょうか？

思い切って、自分が普段接することのない様々な背景を持つ人と交流できる場に出かけてみてください。例えば、町内の掲示板をチェックして、盆踊り大会に参加してみてもはどうでしょうか。たったそれだけで、皆さんが住む地域にどんな人々が暮らし、そこにどのような社会関係が営まれているのかを観察することができます。また、ただ踊る人を眺めるのではなく、実際に体を動かし盆踊りの輪に加わってみてください。なぜ毎年同じ時期に同じ場所で輪になり、踊る必要があるのか、体を動かしながら考えてみてください。

現場に足を運ぶことで他者と出会い、他者への想像力を膨らませ、自分の常識を改めて疑ってみることで、皆さんは日常世界を新たに捉え直すことができるのです。

## 〔3〕 フィールドワークにチャレンジしよう

それでは、教室内でフィールドワークをシュミレーションしてみましよう。

例えば、あなたが実家で食べている正月のおせち料理・お雑煮について、調べてみてください。

まず、実家で食べていたおせち料理について思い出してみましよう。それぞれの料理の名前、作り方、誰が作るのか、誰と食べるのか、また1つ1つの料理がもつ意味について調べてみましよう。

林在圭 2010 「食べる一食べ物を考える」小林孝広・出口雅敏編『人類学ワークブック』新泉社、82頁

政岡伸洋 2004 「あなたの家のお雑煮は？」八木透・政岡伸洋編『こんなに面白い民俗学』ナツメ社、176-177頁



また、あなたが小さい時から実家で食べてきたお雑煮について、詳しく書き出してみてください。雑煮に使われていたのは角餅か丸餅か、白味噌か清ましか、出汁は何から取っているのか、餅は焼いてから入れるか、焼かずに入れるかなど、材料や雑煮の中身、作り方について書き出し、なぜ正月に雑煮を食べるのかについても調べてみましょう。

さらにあなた自身が、おせち料理や雑煮の作り方を受け継いでいきたいと感じているか、受け継ぐことについてどのように考えているか書き出してみてください。

また、教室内で質問する側／される側に分かれ、お互いに実家のおせち料理・雑煮について質問しあってみましょう。相手の話をうまく引き出すことができれば、同じ日本国内でも驚くほど異なるおせち料理や雑煮が食べられていること驚くかもしれません。

話を聞くときには筋道を立てて尋ねるよう心掛け、ノートにメモを取りながら進めます。またボイスレコーダーを使ってインタビューの様子を録音し、聞き直してみることであなたの「聞く力」「話す力」を確認することもできます。

実際のフィールドワークでは、たった1人から話を聞いて満足するのではなく、様々な立場の複数の人から話を聞くことが重要です。また、参与観察やインタビュー調査で得た主観的なデータを、本や論文、地元の図書館や役場などで収集した資料等で裏付けを取って分析し、客観的なデータへ読み直すことも重要な作業になります。人から話を聞くだけでなく、本や資料を用いながら分析し、レポートをまとめてみましょう。

